



Title	日本産頸長蟲科に関する分類學的研究（第八圖版）
Author(s)	玉貫，光一
Citation	札幌博物学会会報，9(2)，243-258
Issue Date	1927-10-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63127
Type	journal article
File Information	Vol.9No.2_006.pdf



日本産頸長蟲科に關する分類學的研究

玉 貫 光 一

(第 八 圖 版)

A STUDY ON THE CLASSIFICATION OF CEPHALOIDÆ IN JAPAN

BY

KOICHI TAMANUKI

(With Plate VIII)

茲に發表せんとする頸長蟲科は從來多くの先進學者に依つて、之を獨立せる一科となして取扱ふものと、擬天牛科に含めて其の一屬として取扱ふものと、又地膽科の一屬となして取扱ふものとの三説がある。本邦にあつても亦、G. LEWIS, G. JACOBSON の兩氏、並びに松村 理、農學博士の三先進學者に依つて早くから研究せられたものであるが、JACOBSON 氏は之を一科となして取扱はれてゐるが、松村博士、並びに LEWIS 氏は擬天牛科の一屬として發居表せられてあるので、一般には此の擬天牛科に屬せしめるの説が信せられてつた。

記述者は此の擬天牛科に關して研究を進めてゐるものであるが、本科中に屬せしめられてあつた、*Cephaloon* 屬を分類するに當り、研鑽の結果、明らかに獨立せる一科となして立たせ得る多くの特徴を具へてゐる事を知り得たので、恩師松村理、農學博士の許可を得、博士の懇切なる指導の下に發表するものである。

本文は全く恩師松村博士を始め、農學士内田登一氏及び當大學農學部實科講師澁谷甚七氏等の教導に依つて成されたものであるから、茲に深く感謝の意を表する。

本 邦 に 於 ける 研 究 歴 史

本邦に於ける頸長蟲科に關する分類學的研究は GEORGE LEWIS 氏に始まり、松村理、農學博士に至つてゐる。即ち LEWIS 氏は西歷 1895 年に本州産の

一新種 *Cephaloon sakurae* を擬天牛科に含めて發表した。⁽¹⁾ 下つて 1905-1913 年には G. GEORG, JACOBSON 氏は *Epamillus variabilis* MOTSCH. の朝鮮に産する事を報告し、⁽²⁾ 松村博士は 1911 年に刊行せる樺太昆蟲誌⁽³⁾ に *Cephaloon pallens* MOTSCH. を挙げ、LEWIS 氏の *sakurae* はこの異名なる事を記せられた。又同博士の 1915 年に出版せられたる昆蟲分類學下卷⁽⁴⁾ に於ては、LEWIS 氏の前出種を再記せられ、之を存在せしめて發表せられた。而して JACOBSON 氏の之を一科となして獨立せしめて發表せるに反し、松村博士は LEWIS 氏に従つて、擬天牛科に屬せしめて發表せられた。以上は本邦に於ける頸長蟲科の研究歴史の大略であるが、之に依つて觀れば從來判明してゐる種類は二屬三種を數へ得るのである。

科の存在に關する論議

頸長蟲科は從來世界の多くの分類學者に依つて上述した様に、科となして取扱ふものと、擬天牛科に含めるものと、地膽科に含めるものとの三説がある。

抑も本科に屬する昆蟲の最初に學界に紹介せられたのは 1838 年である。即ち EDWARD NEWMAN 氏は Canada 産の *Cephaloon lepturides* を新屬新種として擬天牛科に含めて發表せられた。其後各地に於て該屬の種類が発見せられ、多くの學徒に依つて發表せられたが、之等は必ずしも最初の研究者の様に擬天牛科に屬する種類とせられてはゐない。

即ち LE CONTE 氏や LACORDAIRE 氏は之を地膽科に屬せしめ、MOTSCHULSKY 氏は科として獨立せしめ、花蚤科の直前に置いてゐる。⁽⁵⁾ 更に LE CONTE 氏は二度目の研究に於ては、之を MOTSCHULSKY 氏と同様に獨立せる科を形成せしめた。又 HEYDEN 氏はアムール地方の該蟲に關する研究をなすに際し、

(1) G. LEWIS—On the Cistelidae and other Heteromorous Species of Japan (Ann. Mag. Nat. Hist. (6) XV, p. 444, fig. 10, 1895).

(2) G. JACOBSON—Die Käfer Russland und West-Europas, p. 1012, tab. 83, fig. 34, 1905-13 (35 は誤り).

(3) S. MATSUMURA—Erster Beitrag zur Insekten-Fauna von Sachalin, p. 129 (Journ. Coll. Agr., Tohoku Imp. Univ., pt. 1, p. 129, 1911).

(4) 理學博士、松村松年—昆蟲分類學下卷 p. 104, tab. 3, fig. 20 (大正四年).

(5) K. ESCHERICH 氏に依れば MOTSCHULSKY 氏は之を長朽木蟲科 (MELANDRYIDÆ) に屬せしめたと云つてゐるが、SCHENKLING 氏編輯の Catalogue (BORCHMANN 氏擔當) には此事實はない。且つ又此 Catalogue には頸長蟲科の設定者には M 氏を認めず、J. LE CONTE 氏を設定者としてあるが、M 氏は Schrenk's Reisen, II, p. 140 には *D. Anthophiles*, *Pectinipedes*, *Cephalaonides* と記して立派に獨立せしめてゐる、故に眞の設定者は LE CONTE 氏ではなく MOTSCHULSKY 氏である。

之を地膽科に編入し、此の他 ESCHERICH 氏も亦 HEYDEN 氏の様に地膽科に含めて亞科 ZONITINÆ に入れて發表した。更に下つて F. BORCHMANN 氏は、其目錄を編するに當り MOTSCHULSKY 氏や LE CONTE 氏等の獨立説を採用して、之れを地膽科の直後に置いた。此獨立説に賛同する學者は BORCHMANN 氏の目錄に依れば歐羅巴にあつては、CHAMPION, SEMENOW, JACOBSON の三氏であり、北亞米利加にあつては LE CONTE 氏を始め、該蟲の研究者の何人もが之を認めてゐる。

然らば今之を地膽科に含めるを至當とした一人である。ESCHERICH 氏の記する地膽科中の ZONITINÆ 亞科の特徴を譯述すれば次の様である。

觸角剛毛狀、稀に糸狀を呈するか、或は先端は少しく膨大す。先端の膨大せるものにありては翅鞘の接合部は隔離し、後胸板は延長するか、若しくは後頭部は頸と隔離せず。後胸板は長く、爪は多くは有齒にして無齒なるときは接合部は隔離す。翅鞘の接合部は先端に至る迄相合し、若くは多少隔離し、常に後翅を有す。雄の交尾器は腹部に水平、癒着せる Paramera は宛然被蓋の如く陰莖上に横はる。

之等の特徴は後節に於て詳記する様に頸長蟲科の特徴に大部該當するのである。

更に之を擬天牛科に屬せしめるを至當となす一人である松村博士に従ひ其の著、昆蟲分類學に解く擬天牛科の特徴を列記するならば次の様である。

觸角十一節、雄に限り十二節なるものあり、絲狀若くは鞭狀を呈し、眼前に位す。小腮鬚の末端節は普通斧狀をなす。頭は突出し、前胸細く、翅鞘長し。脚は細長、第三跗節は二個の小片に分支し、又心臟形をなすものあり。其形天牛に類似するも翅鞘の軟質なるを以て認別すること難からず。(後略)

之に依つて觀るときは、該蟲は第三跗節は二個の小片に分支し、又心臟形を呈せるものがあると云ふ特徴を除いての他は全く擬天牛科の特徴を具有してゐるものであるが、此の第三跗節の特徴は擬天牛科を決する重要な特徴と思考せられるが、頸長蟲科にあつては後章に於て詳記する様に全く之に該當せず、寧ろ地膽科のそれに一致し、且つ其の爪には擬天牛科の昆蟲の何れの種類にも存しないが、地膽科の昆蟲の特徴なる小爪を有する所より、若し夫れを獨立せしめづに何れの科にか含ましめんとするならば、擬天牛科に屬せしむるよりも寧ろ地膽科に屬せしむる方が至當であると思はれる。

然し乍ら該蟲は地膽科、擬天牛科の兩科の有する多くの特徴を具有する

も、更に他の特殊の形態即ち跗節、爪、其他雄の生殖器の類似等に依つて著者も亦 BORCHMANN 氏の如く獨立せしめ之を地膽科の直後に置き、本邦産鞘翅目、異節團に加へたのである。

特 徴

成蟲、細長にして頭部及び胸部は突出し、下方に彎曲す。複眼は光澤ある黑色にして擬天牛科の如く腎臟形をなす。觸角は絲狀にして、末端に至るに従ひ肥大し十一節より成り、頭、胸部を合したるよりも稍々長し。口部は前方に吻狀に突出し、下腮鬚の末端は斧狀を呈す。大腮には微小なる四個の齒を有す。頭部は基部細く、漸次廣がりて團扇狀を呈し、頸は判然せず。胸背板は基部廣く、前方に狹まりて鐘狀を呈す。翅鞘は長く、末端に至りて細まり、側縁は内方に彎曲す。脚は細長、後肢は最も發達し、端刺は細くして鋭く、爪は二分し、齒を並列す。

形 態

a. 頭部。頭部は前方に突出し團扇狀を呈し、先端に至るに従ひ擴まる。頭楯は普通鈍角の矩形を呈し、中高にして微小なる不規則の點刻を散布し、微毛を有す。觸角は頭楯の基部に近接して起り、十一環節より成り、絲狀にして微毛を有す。普通第三環節最も長く、漸次短小し、第九及び十の兩節は圓錐形にして、その幅廣く、末端節は圓筒形にして第四環節と略々同長なり。(Pl. VIII, fig. 2) 複眼は腎臟形にして大きく、黑色を呈するもの多けれども斑紋を有せるものもあり。上唇は矩形にして前縁は廣く、凹陷し、頭楯の如く不規則なる微小の點刻を散布し、微毛を有す。大腮は堅硬にして鋭く、四本の鋸齒を有す。下腮は太くして強固。基節、脛節は角形にして、脛節は基節よりも遙に大なり。外葉は細長く、先端は二分し、各分支枝よりは細微なる施毛を生じ、内葉は外葉よりも少しく太く、内方には刷毛狀の微毛を並生す。下腮鬚は四節よりなり、第一節は極めて短く、他の三節は長く、就中第二節は最長にして、第三、四節を合したると同長、末端節は斧狀を呈す。下唇は四角形、基部狹く前方に至るに従ひて擴がる、下唇鬚は三節よりなり、各節殆んど同長にして、普通斧狀を呈す。(Pl. VIII, fig. 1).

b. 胸 部

イ、背面。胸背板は鐘狀を呈し、平滑にして微を毛密生し、中高にして

前、後兩縁は少しく縁取られ側縁の中央部は少しく突出す。(Pl. VIII, fig. 3)

ロ、腹面

前胸。腹板の前縁は甚だ深く彎入し、後側板は甚だ小なり。

中胸。腹枚は三叉形にして中央部は長く延長し、後肢基節間に突出す、前側板は三角形にして極めて大きく、後側板は稍々矩形にして小なり。

後胸。腹板の中央には深き縦溝を有し、その兩側は略々菱狀を呈す、前側板は稍々矩形をなし、後側板は楔狀にして大なり。

c. 稜狀部。稜狀部は舌狀にして大ならず。

d. 翅鞘

翅鞘は細長にして末端は尾節を掩も肩部最も廣く、漸次細まる。外縁は少しく縁取られ、基部は腹部を僅かに被ふ、全面平滑にして光澤ある天鵝絨様の微毛を密生し、斑紋を缺き、接合部及び側縁には黑色の縦條を有するものあり。接合部の先端は少しく外方に開く。

後翅は膜質にして太き翅脈を有し、灰色半透明なり。

e. 脚

脚は極めて細長く、前、中、後肢共に同形なり。

基節は甚だしく發達し、楔狀にして肥大し、側面及び裏面は剝らる。

轉節は三角形にして細長なり。

腿節は圓筒形下半部は少しく膨大す。

脛節は細長にして末端に至りて少しく擴がり各肢共に一對の距を具へ、前肢にありては極めて小さく、中、後肢に於ては著しく發達す。(Pl. VIII, fig. 4).

跗節は前肢は五節、中、後肢は四節より成り、各肢同形、細長にして少しく扁平なり。前肢にありては末端節最も長く、中、後肢にありては第一節最も長大なり。

爪は各肢共に一双の小爪 (Empodium) を有し其形長斧形にして平たし。爪は鎌狀に彎曲して鋭く、普通鋸齒狀の小齒を有す。クビナガムシ屬にありては小爪は爪よりも短し。(Pl. VIII, fig. 5).

f. 腹部

腹部下面は五環節より成り、何れも略々同長なるも、先端に至るに従ひ細まり、クビナガムシ屬にありては雄の第五節末端は三角形に切り込まれ、側鈎を有す。側鈎は舌狀に二分して兩側より生じ、生殖器を被包す。

g. 生殖器

雄一雄の生殖器は腹端より出づる舌狀の二側鉤は稍々キチン質にして黒色、其周縁には微毛を密生す。陰莖は二節より成り、第一節は圓筒形にして、第二節は缺狀に二分し、第一節の末端は斜に二分し、第二節を基部の外側被包す。第二節には數本の灰白微毛を生ず。(Pl. VIII, figs. 6, 7).

雌一雌の生殖器は尾節に包まれて現はれざれども、之を摘出すれば特殊なる産卵管を發見す。産卵管は一對の矢の根狀を呈せる附屬葉片を以て包まる。其葉片はキチン質にて構成せられ、背面は少しく中高にして、腹面は陷落し、上半部の内方及び下半部の側縁は縁取られ、上半部の縁は入形にして強く、下半部の側縁は弱し、背面は極めて短かき天鵞絨様の軟毛を密生す。(Pl. VIII, fig. 8).

系 統

本科に於ける分類學上の位置に關しては、既述した様に科として認めるか或は他の科に隸屬せしめて取扱ふべきかは、從來多くの先進學者に依つて論議せられたものであるが、今前章に於て述べた形態上から考察して、本科と之の近縁科との關係を明らかにし、以て其系統を判明にしよう。

先づ之を擬天牛科に隸屬せしめようとするならば次の相似に於て成す事が出来る。

- a. 複眼の弦月形を呈せること。
- b. 頭部は吻狀に突出せること。
- c. 體は細長で纖弱であること。

然し乍ら擬天牛科の昆蟲は之等の特徴の以外に次の様な重要な特徴を具備してゐる。

- a. 跗節は二片の小片に分支するか、又は心臟形を呈してゐる。
- b. 通常胸背板は前方に擴がつてゐる。
- c. 複眼は極めて大きく、頭部の大半を占めてゐる。

又之を地膽科の中に含め得られるとすれば次の様な相似に於てである。

- a. 爪には小爪を有すること。
- b. 胸背板は鐘狀なること。
- c. 頭、胸部の甚だしく下向してゐること。
- d. 地膽科中の *Stenodera* 屬に其生殖器が酷似してゐること。(K. ESCHERICH 氏に據る)。

地膽科の昆蟲の重要な特徴としては之等の他に次の様な特徴を具備し

てゐるが、該科の昆蟲には之等の特徴はない。

a. 後頭部は頸狀を呈し、後頭との間は細溝を以て明瞭に堺せられてゐる。

b. 頭部は圓形を呈し、胸背板の幅よりも遙に廣く、且つ頭頂は胸背板よりも遙に高まつてゐる。

如斯頸長蟲科の昆蟲は其形態上に於て、擬天牛科にも亦地膽科にも屬せしめ得る多くの特徴を有してゐるが、之等の二科の有してゐない特殊なる形態を具へてゐる事を以て本科の主要特徴となし、二科に共通する特徴を以て副特徴として之を獨立せしめ、以て分類學上の位置を確立せしむるものである。而して其生殖器の相似と脚部の相似とによつて地膽科に最も近縁なる事を知り得るので、之を其直後に置くのを至當であると信ずる。

分 類

本邦に産する頸長蟲科の昆蟲は BORCHMANN 氏に従へば、二屬二種を産する事になつてゐるが、記述者の研究に依れば、B氏が二つの種類を各々異なつた屬に編入した事は誤りで、二種共に同一の屬に包含すべきであり、且つ此他に JACOBSON 氏が朝鮮に産する事を報告した一屬一種と一未記録變種と四新變種の産するを知る事が出来た。

之等を T. CASEY 氏及び JACOBSON 氏の分類法を基本となして分類するならば、本邦産の該種は次の一族に相當する。

族 の 檢 索 表

跗節は細長にして末端前節は變化せず。爪は通常細く、尖端は弓狀に彎曲し、内側には櫛齒狀の小齒を有す **クビナガムシ族**

クビナガムシ族 (新稱)

Cephaloonini CASEY

Entomological News, p. 193 (1889).

跗節は細長にして末端前節は他の節と同一にして、爪は細く、内側には櫛齒狀の小齒を有し、先端弓狀に彎曲して鋭し。觸角第三節は先端の三節を合したるものと略々同長なり。

本族には次の三屬を含む。

属の検索表

1. 小腮鬚の末端節は圓錐形にして、内側は外側よりも少しく短く、其先端は内方に傾斜して短く、端直なり⁽⁶⁾ **ケビナガムシ属 (Cephaloon)**
2. 下腮鬚末端節の内側は甚だ短く、先端は斜に強く弓狀に彎曲す⁽⁷⁾
..... **スポニデアム属 (Sponidium)**
3. 小爪は爪と略々同様に鎌狀を呈し、觸角第九、十の兩節は雌にありては稍々橢圓形を呈す⁽⁸⁾ **エファミルス属 (Ephamillus)**

本邦に産する頸長蟲科の昆蟲は第一属及び第三属に隸するものであるが第三属は不幸にして觀察する事が出来なかつたので本属の記載は總て他の研究者の記載を引用する事にした。而して此第三属に就いては ESCHERICH 氏は第一属に含め其属の存在を認めてゐないが、最近の研究者である JACOBSON 氏は之を存在させて記述せられてゐるので、後者の説を其儘に取入れる事にした。

ケビナガムシ属 (新稱)

Cephaloon NEWMAN

Ent. Mag. V, p. 367 (2838).

頭部は長く口吻狀に延長し、觸角は細長にして先端の三節は肥大す。第三節は先端の三節を合したるものと同長。爪の内側に小齒を有し、小爪は楕圓狀を呈す。本属は新北區地方に一種、舊北區地方に二種を産し、本邦にあつては次の二種を産す。而して其中の一種は本州特産の種類なり。

1. *Cephaloon pallens* MOTSCHULSKY

Schrenk's Reisen II, 2, p. 140, tab. IX, fig. 15 (1860); MATSUMURA, Journ. Coll. Agr., Tohoku Imp. Univ., IV, pt. 1, p. 129 (1911).

コガシラクビナガムシ (改稱)

コガシラカミキリモドキミ (松村)

黄色。唯だ複眼、下腮鬚の末端及び後肢腿節の末端のみ黑色。背面は微細なる軟毛を以て包まれ、頭、胸部は翅鞘に比して稍々濃色なり。腹面は背面に比して少しく曇る。雌雄に依りて其形態を少しく異にし、雌は雄よりも

(6), (7) CASEY 氏に依る

(8) JACOBSON 氏に依る

幅廣く腹部は肥大し、第九、十の兩節は雄に比して少しく厚し。雄は体細く腹部は暗黒色、若くは黒色を呈す。

体長 雌—13-14 耗 雄—12-13.5 耗

体幅 雄—2.5-3 耗 雌—2-2.5 耗

産地 富 内 12/VII 1909 ♀ 一頭 小熊捍博士採集。

貝 塚 13/VII 1909 ♀ 一頭 同 博士採集。

東 白 浦 2/VIII 1909 ♀ 二頭

♂ 三頭 同 博士採集。

内 路 13/VII 1923 ♀ 一頭 2/VIII 1924 ♂ 一頭

村瀬吉氏採集。

敷 香 23/VII 1924 ♀ 一頭 ♂ 三頭 村瀬吉氏採集。

分布 南樺太、アムール。

本種は極めて變化性に富むものであつて、HEYDEN 氏はアムール地方の該蟲の色彩の變化せるものを各々本種の變種として發表してゐる。此内の一に該當してゐるもので當教室に保存せられてゐるものは次の一變種である。

Cephaloon pallens MOTSCHULSKY var. *cinctipenne* HEYDEN

Deutsche Ent. Zeitsch. p. 100 (1897).

本變種の原因と異なる所は次の如し。

1. 原種よりも纖弱なり。
2. 胸背板の側縁及び前半は黒色を呈し、前半黒色部の中央は舌狀に後方に延長す。
3. 頭部の背面及び上唇は黒色なり。
4. 翅鞘接合部及び其側縁は黒色に縁取らる。
5. 腹部下面節は末端節の先端のみを残して漆黒色を呈す。

体長 12 耗 体幅 2 耗

産地 内 路 1/VIII 1924 ♂ 一頭 村瀬吉氏採集。

分布 南樺太、アムール。

Cephaloon pallens MOTSCHULSKY var. *nigromaculatum* var. nov.

(pl. VIII, fig. 9)

本變種は次の諸點に於て原種と區別せらる。

1. 頭頂には黒色の圓紋を有す。
2. 胸背板の前縁及び側縁並びに前半の中央に達せる一線は黒色を呈す。

3. 中、後板は黑色なり。

4. 腹部下面節の接合部及び其側方は黑色。

体長 12 耗 体幅 2 耗

産地 富内 22/VII 1909 ♂ 一頭 小熊捍博士採集。

本變種は HEYDEN 氏の變種 *maculicollis* に酷似してゐるが、頭部に有する黒紋が相違してゐるので茲に一新變種となすものである。

Cephaloon pallens MOSTSCHULSKY var. *sachalinense* var. nov.

(pl. VIII, fig. 11)

本變種の原種との相違は次の如し。

1. 頭頂には橢圓形の黑色紋を有す。
2. 胸背板の側縁及び前縁（但し中央部を僅かに残す）並びに中央より稍前方にある楔狀紋は黑色。
3. 翅鞘接合部及び腹縁下面節は漆黒なり。（但し末端節の末端を残す）。

体長 14 耗 体幅 2.5 耗。

産地 一の澤 25/VII 1919 ♂ 一頭 澁谷甚七氏採集。

Cephaloon pallens MOTSCHULSKY var. *trimaculatum* var. nov.

(pl. VIII, fig. 10)

本變種の原種との相違は次の如し。

1. 頭頂には黑色の橢圓紋を有す。
2. 胸背板の中央には薄き三條の短き黒縦線を有す。
5. 後胸板及び第一、第二、第三腹部下面節の前半は黑色。

体長 12 耗 体幅 2 耗。

産地 日光（中禪寺）31/VII 1911 ♀ 一頭 松村博士採集。

2. *Cephaloon sakurae* LEWIS

Ann. Mag. Nat. Hist. (6) XV, p. 444, fig. 10 (1895);

MATSUMURA, Konchū Bunruigaku, pt. II, p. 104. tab.

3, fig. 20 (1915).

クビナガムシ (改稱)

クビホソカミキリダマシ (松村)

背面濁黄色。全體絹様の灰黄色の軟毛を密生す。上唇、頭楯、頭頂は黒

色。胸背板には大なる六角形の黒紋を有し、下部は狭し。稜狀部黒色。翅鞘の接合部並びに側縁には太き黒色の縦條を有す。腹面、頭部及び前、中胸部は濁黄色。後胸は黒色。腹部黒色、各節の側縁と後縁とは濁黄色を呈す、脚は濁黄。後肢脛節の末端及び腿節の下半部は黒色なり。

本種は前種に酷似すれども、頭部は前種よりも膨れたると、翅鞘には幅廣き縦線を有せる事と、体色の濁黄色なる事等に依りて區別するを得べし。

体長 ♀ 14 耗 体幅 2.5 耗
♂ 12.5 耗 14 耗 体幅 2 耗

產地 秩父 17/VI 1913 ♀ 一頭 高林兵衛氏採集。
高尾山 10/VI 1926 ♀ 一頭 ♂ 二頭

平山修次郎氏採集。

宮の下、須走、須山 G. LEWIS 氏採集。

分布 本州。

本種は LEWIS 氏に依つて富士山附近の地方に於て十六頭の多數を採集せられてゐるが、該蟲は現在の事實に依れば、本州中部の高原地方に局限せられて生活してゐるものと思ふ。LEWIS 氏は十六頭の採集品の中で二頭だけ色彩上に變化のあるものがあつたと記述してゐるが、之は或は記述者が次に記載する變種 *japonense* ではなからうか。

Cephaloon sakuræ LEWIS var. *japonense* var. nov.

(pl. VIII, fig. 12)

本變種は次の諸相違に依りて原種より區別せらる。

1. 胸背板の黒紋は不正形を呈し、後端の兩側には更に一對の小黑點を有す。
2. 翅鞘は暗黄褐色を呈し、黒色縦線を缺く。

体長 12 耗 体幅 2 耗

產地 秩父 11/VI 1913 ♀ 一頭 高林兵衛氏採集。

エフアミルス屬 (新稱)

Ephamillus SEMENOV

Horæ Soc. Ent. Russ. XXXIV, p. 495 (1899-1900).

小爪は爪と略々同様に弱く鎌狀に曲り、觸角の第九、十兩節雌にはありては稍々圓筒形を呈す。後肢脛節は雄にては強く曲り、且つ其下側に淺き二

重の小溝を有す。(JACOBSON 氏に依る)

3. *Ephamillus variabilis* MOTSCHULSKY

Schrenk's Reisen II, 2, p. 141, tab. 9, fig. 16 (1869);

JACOBSON, Käfer Russ. u. West-Europ. p. 1012, tab.

83, fig. 35 (1905-13).

オホクビナガムシ (新稱)

黒色。前述の二種よりも遙に大なり。腹部の一部、前脛節、中、後跗節の一部及び初めの三觸角節、小腮鬚、上唇の一部及翅鞘は黄褐。翅鞘側縁の下半部は黒色。雌の腹部は黄褐。(ESCHERICH 氏に據る)

体長 16 耗 体幅 3.5 耗 (JACOBSON 氏に據る)

産地 朝鮮 (JACOBSON 氏)

分布 朝鮮 アムール。

附記—以上本邦に産する頸長蟲科の昆蟲の分類を終るものであるが、BORCHMAN 氏はコガシラクビナガムシ (*pallens*) は *Sponidium* 屬に入れ、クビナガムシ (*sakurae*) は *Cephaloon* 屬に入れてゐるが、CASEY 氏の分類法に従つて、下腮鬚と觸角の特徴を基本として研究するならば、B 氏の目録は次の様に訂正せらるべきである。

1. *Cephaloon* 屬に編入せられてゐる該蟲は *lepturides* NEWMAN⁹⁾ と *sakurae* LEWIS の二種を除き悉く *Sponidium* 屬に編入する。
2. *Sponidium* 屬に隸せしめたる *pallens* MOTSCHULSKY は之を *Cephaloon* 屬に編入する。

而して *Cephaloon* 屬は北米に産する *lepturides* 及びアムール並びに日本産の前述の二種を含み、*Sponidium* 屬は北米に産する數種の種類を含むものである。従つて又 JACOBSON 氏が *pallens* を *Sponidium* 屬に入れてゐるのも誤りであり、且つ又其圖版は *pallens* と *variabilis* とを入れ違ひてゐるが、之は恐らくは印刷の誤りであらう。

分

布

從來の記録に徴すれば本科の昆蟲は舊北地方に於ては東西比利亞、アム

9) CASEY 氏は其書述に於て *lepturides* NEWM. は *Cephaloon* 屬の Type であつて、觸角は短く棍棒狀を呈する事に依つて、他の屬と區別する事が出来ること云つてゐる。

ール地方に限つて分布し、新東北地方に於ては殆んど太平洋沿岸地方に限つて分布してゐる。而して何れの地方に於ける種類も比較的少數のものらしい。

更に我國に於ける分布状態は、既に分類の章に於て記述した様に本州に於ては日光、須走、高尾山等の中央高地に限つて産し、南樺太にあつては南部は一の澤から中央部の東白浦に、更に北端の敷香地方迄産する事を知る事が出来る。而して本州にあつてはアムール地方に産する種類と、本州特殊の種類とを産するに反して、兩地方の中間に位置する北海道に此何れの種類をも産しないのは不思議の事實ではあるが、今後充分の蒐集調査を進める時は、少なくとも本州に迄分布してゐる西比利亞、アムール地方に産する種類を発見し得べきものと想像する。記述者は不幸にして其標本を見る事を得なかつたが、朝鮮に産する *E. variabilis* MOTSCH. は之も亦充分の調査すれば南樺太乃至北海道に於て発見せらるゝ可能性があらう。

LEWIS 氏に依れば本州の特産種は梨、櫻等の開花期に採集した事を記してゐるが、南樺太に産するものは七月乃至八月中の採集品である。之は其地方の地理的位置に依つて發生する状態の變化を物語つてゐるものである。

今本邦産の種類の分布を示せば次の様である

種 名	地 方 名						大 陸
	大 陸	道 南	州 北	州 本	州 四	州 九	
1. <i>Cephaloon pallens</i> MOTCH.	*						アムール
<i>C. pallens cinctipenne</i> HEYD.	*						アムール
<i>C. pallens nigromaculatum</i> TAMAN. (var. nov.)	*						
<i>C. pallens sachalinense</i> TAMAN. (var. nov.)	*						
<i>C. pallens trimaculatum</i> TAMAN. (var. nov.)			*				
2. <i>Cephaloon sakuræ</i> LEW.			*				
<i>C. sakuræ japonense</i> TAMAN. (var. nov.)			*				
*3. <i>Ephamillus variabilis</i> MOTSCH.					*		アムール

* 印は記述者の觀察せざるもの

RÉSUMÉ.

My study convinces me that Gen. *Cephaloon* might be classified to a new family perfectly independent from *Oedemeridae* to which it has hitherto been belonged. Even though *Cephaloon* closely resembles to *Oedemeridae* and *Meloidae*, the following characteristics will determine what I want to argue and enable the family to be independent and rankend next to *Meloidae*.

Head and thorax projecting and bending; antenna eleven jointed, filiform, and little longer than head and thorax taken together, head fan-shaped, narrow at the base and broad at the apex; the collum not conspicuous to observe; pronotum gradually becoming broader backwards, slightly curved at middle of the sides; elytra long and slender; the legs slender, the hind-leg extraordinarily developed than others; the claws on each leg with an empodium and serrated teeth within.

According to F. BORCHMANN the insects in Japan that belong to *Cephaloidae* are two species. But after a careful study I am quite convinced that he has made a great mistake in treating the species under the different genus, and moreover that the genus and the species which were announced to be found in Corea by G. JACOBSON must be added to this family. So in my opinion, the family in Japan, contains two genera, three species and five varieties altogether, and they are as follows:

1. *Cephaloon pallens* MOTSCHULSKY

Habitat: Saghalien.

Cephaloon pallens MOTSCHULSKY var. *cinctipenne* HEYDEN

Habitat: Saghalien.

Cephaloon pallens MATSCHULSKY var. *nigromaculatum* var. nov.

This variety differs from the typical species in the following points:

1. Some black spots on the vertex.
2. Fore- and hind-margins black, with a longitudinal black line from the middle of the fore-margin.
3. Meso- and meta-sternum black.
4. Suture of the abdomen beneath and the lateral sides black.

Habitat: Saghalien.

Cephaloon pallens MOTSCHUSKY var. *sachalinense* var. nov.

This variety differs from the typical *C. pallens* as follows:

1. A large oval black patch on the vertex.
2. Fore- and outer-margins of the pronotum almost black, with a short longitudinal black stripe on the middle.
3. Suture and outer-margin of the elytra black.
4. Meta-sternum and ventral surface of the abdomen black, except the extremity of the terminal segment of the latter.

Habitat: Saghalien.

Cephaloon pallens MOTSCHULSKY var. *trimaculatum* var. nov.

This is easily distinguishable from the typical species in the following points:

1. A large oval black patch on the vertex.
2. Three longitudinal short pale blackish lines on the middle of the pronotum.
3. Meta-sternum and the basal half of the 1st, 2nd and 3rd segments of the abdomen beneath black.

Habitat: Honshu.

2. *Cephaloon sakuræ* LEWIS

Habitat: Honshu.

Cephaloon sakuræ LEWIS var. *japonense* var. nov.

It differs from the typical species as follows:

1. An irregular black patch and two small black spots on the pronotum.
2. Elytra dark yellowish, slightly bordered by a narrow black line except at the fore-margin.

Habitat: Honshu.

3. *Ephamillus variabilis* MOTSCHULSKY

Habitat: Corea.

Explanation of Plate VIII

1. *Cephaloon sakurae* LEWIS Head
 2. " " " Antenna
 3. " " " Pronotum a. upperside b. underside
 4. " " " Hind leg.
 5. " " " Claw and empodium
 6. " " " male Genitalia
 7. " " " Penis a. upperside b. lateral side
 8. " " " female Genitalia
 9. *Cephaloon pallens* MOTSCH. var. *nigromaculatum* TAMAN. (var. nov.)
 10. " " " var. *trimaculatum* TAMAN. (var. nov.)
 11. " " " var. *sachalinense* TAMAN. (var. nov.)
 12. *Cephaloon sakurae* LEWIS var. *japonense* TAMAN. (var. nov.)
-

